

～養育里親として、大家族として～

平成14年に里親登録をしてから、気が付けば12年の月日が流れました。どこかで、自分の想いを纏めておきたいと思いつつも、子どもたちとの毎日の生活であつという間に1日が終わり、じゅくりと振り返ることも、なかなか出来ない日々でした。

「里親を始めたきっかけは何ですか？」と、いろいろな方によく聞かれます。仕事もあり、家族もあり、実子もある者が、どんな思いで里親を始めたのだろうか？と思われても不思議ではないでしょう。

実は、自分自身にも、まだよく分からないところもあります。

しかし、私の中で、ずっと燻っていた思いは、今の世の中にも、自分自身にも、何かが足りないということでした。

結婚して、子どもが順番に授かっていく間にも、家内とは時々里親の話をしていました。

そして、末娘が5歳の秋に、研修を経て里親登録をしました。

子どもたちを丸く座らせて、ハリー・ポッターのように（ハリーは死別ですが）様々な理由で親と暮らせない子どもがいる、という話をした覚えがあります。

里親を志した第一の理由が、この子たちを何とかしたいと思ったことにあるのは、もちろんですが、今強く思うことは、里子を含めた当家の10人前後の家族構成が、私にとっては、とても居心地が良いということです。

人数が多く、それぞれの状況もバラバラであるということは、何かと大変ではないかとよく言われます。やらなければならぬ事、あれこれ考えなければならぬことは、確かに沢山あります。

しかし、却って気持ちは楽なことも多いように思います。

ごく普通の家族ですから、これまで、家内との間にも、何とも意見のぶつかり合いや、気持ちの行き違いもありました。子どもたちには反抗期もありました。もし、自分の家族が、家内と子ども二人くらいの、平均的な核家族であったとしたら、このような出来事の一つ一つが、もっと重たく自分にのし掛かってきたのでは、なかっただろうかと思うのです。

家内と喧嘩になった時も、叱った子どもが家を飛び出していった時も、いつも、その横で心配そうに成り行きを見ている子がいたり、反対に、我関せずと無邪気に遊んでいる子がいました。いろいろ大変な時も、そのことだけに関わってばかりいられない。夜遅くなっても帰ってこない子を心配しながらも、寝かしつけなければならぬ子を、放っておくことはできない。結果として、一つ

のことに思いつめたり、行き詰っていることがなかったということです。
実子を含めた子どもたちは、どう思っているのでしょうか？
順番を待つのではなく、もっと親を独占して、いっぱい構って欲しいんだろう
などは思います。

しかし、慌ただしい毎日の中で、偶々、他の子が出払ってしまった隙を狙って、纏わりついてくる子の姿や、時折夫婦だけになってしまった時の会話は却って新鮮で、とても楽しく感じます。

生身の人間ですから、良いところも悪いところもさまざまに抱えながらではありますが、決して団体生活ではないけれども、大家族として支えあったり、反発し合ったりしながら、親子共々、何かを身につけていく、今の暮らしが、ずっと考えていた、足りない何かを埋めてくれる生き方だと思う今日この頃です。